

Living the way we want the world to live

特集



第41回MRAコー世界大会

第2回日米欧財界人円卓会議

MRA円卓会議に出席して

2 P

田淵節也

6 P

阪本 勇

8 P

尾関雅則

10 P

MRA中南米キャンペーン

兼松 恵

13 P

アフリカ・ザンビアで過ごした

2年間(その4)

14 P

高瀬会長のご逝去を悼む

相馬雪香

18 P

第2回 日米欧財界人円卓会議



スイス・コー 1987年 8月24日～27日

第二回日米欧財界人円卓会議は8月24日から27日にかけてスイスのコーで開催された。オランダのフィリップス、フランスのジスカールデスタン両氏の提唱で昨年始まったこの会議に、今年はヨーロッパ九人、アメリカ四人、日本七人の計二十人が参加した。

昨年と同じく、レマン湖を眼下に、対岸のフランスの山々をのぞむ「パノラマ・ルーム」で、今回新たに作られた階円形のラウンド・テーブルにアルファベット順に着席した参加者は、昨年とは違って多くの顔なじみを見つけてなごやかな幕明けとなった。

一、「相手が悪い」という風潮の中の「互いから学ぼう」という雰囲気。

第一セッションの冒頭では日米欧各一名ずつから昨年の第一回会議から第二回会議に至るまでの進展状況について報告があった。鉄道総合技術研究所尾関理事長は、「昨年以來経済情勢も社会情勢もはるかに悪化している。昨年の日本側参加者は前川レポート提案の推進を約束して帰国し、我々の提言を中曽根総理に進言したが、不均衡は拡大している。こうした中で「悪いのは相手」という風潮が抬頭してきているが、とて

も心配で、戦前の1930年代を思わせるものがある。キャノン賀来社長も日本国内での改革に奔走中で今回参加ができなかった。」と述べた。

フランスのジスカールデスタン氏は「フランスの貿易赤字が三倍に増えるなど確かに状況は悪化しているが、一方で日本の社会や文化への理解が深まり、又、新前川レポートへの認識も深まっている。昨年以來、1992年のEC市場の完全統合化が決まり、ヨーロッパに自信が強まっており、この自信が前向きに働くと思われる」と述べた。

アメリカのSRI専務理事ネーター氏は、「去年から今年前半にかけて吹き荒れた反日感情は最近あまり聞かれなくなり、ともかく先ず自らを正そうという風潮が強まり、日本からの進出で打撃を受けた地域でも日本批判が聞かれなくなった。」と報告した。

こうした雰囲気の中で今回の円卓会議の方向付けを買って出たのがスイスのインターアリアンス銀行のフグラード頭取で、「近年の貿易不均衡は、日本のターゲットポリシー、障壁、内需不足といった理由が主因ではない。市場が開放されて輸入が増えたのはNICSが主であり、一方欧米は国の内外共に競争力を失っている

のがその証明である。真の原因は欧米の社会構造の歪みである。日本の社会の方がより良く機能している訳であり、経済を支える社会そのものについて日本から学ぶべきである。」と提言した。イギリスのランク・ゼロックス社のホーンビー会長も「せっかくの機会なので企業の社会的責任といった広い観点からの意見交換をしたい。貧富の拡大、教育の荒廃といったことがイギリスの問題だが、教育の役割などについても日本から学びたい。」と述べた。

二、「自分でできることは自分で解決する」

これに対して松下電器の山下相談役は「何か裁判で情状酌量を受けたような気がする。昨年のコー以来どんな理由にせよ、一国だけが巨大な黒字を計上していることは世界経済の発展上許せない、ということを感じ海外生産の拡大等に全力を尽くしてきた。政府の対策を待つのではなく、積極的に取り組んでいきたい。」と答えた。

前川委員会の委員でもある野村證券田淵会長は「貿易摩擦も改善の原因になったという面もある。前川レポートは通常であれば大学の教科書で終わるところが摩擦のおかげで実行されることとなった。国民や民間

が、政府が需拡大に向かったな、と感じたのがそのきっかけである。不均衡も一挙には解決しないが、目に見える形で減り始める。要は、問題が起った時に、自分でできることは自分で解決する、という態度が重要である。」と語った。

これに関連して経済同友会河合専務理事は「問題解決にグローバルな考え方が必要で、アメリカの包括法案も、世界全体からみてマイナスの要素もあるのではないか。元々、輸出無しでもやっていけるアメリカが急に輸出マインドをもつにも時間がかかるし、例え好況であっても輸出が必要な日本とは国の成り立ちが異なる。こうした違いに思いやりを持ちながら、世界全体の繁栄と特殊性の調和をどうはかるかが大切だ」と述べた。

三、保護主義よりも競争力改善

一方、欧米からも自助努力の成果が発表された。ジスカールデスタン氏は「日本との競争が健全なプレシヤを政府にかけることになり、賃金、社会保障、政府減税といった点から国際競争力強化の方向がうち出され、これをテコに我々も保護主義反対の動きをしている」と報告したほか、ホーンビー氏も「日本との競争でシェアは減ったが、それがきつ

日米欧財界人円卓会議参加者リスト

ヨーロッパ

フレデリック・フィリップス夫妻

(オランダ)

(フィリップス社元会長)

ハリット・ウグナー

(オランダ)

(シエル石油会長)

オリビア・ジスカールデスタン

(フランス)

(ヨーロッパ経営大学院副理事長)

モーリス・アミール

(フランス)

(タイムケン・ヨーロッパ・アフリカ)

デレック・ホーンビー夫妻

(イギリス)

(ランク・ゼロックス社社長)

ネビル・クーパー夫妻

(イギリス)

(トップ・マネージメント・パートナー)

フレデリック・シヨック夫妻

(西ドイツ)

(シヨック社社長)

ラインハルド・フィッシャー夫妻

(西ドイツ)

(フランコ社社長)

ピーター・フグラ夫妻

(スイス)

(インター・アリアンス銀行頭取)

アメリカ

ウエルドン・ギブソン

(SRIインターナショナル相談役)

ロナルド・ネイター

(SRIインターナショナル専務理事)

ジョージ・シャーマン夫妻

(ジョージ・シャーマン社社長)

ジョン・モア

(スコビル社副社長)

日本

居林次 雄夫妻

(経済広報センター常務理事)

小笠原 敏 晶夫妻

(ニフコ社長、ジャパントイムズ会長)

尾関 雅 則夫妻

(鉄道総合技術研究所理事長)

河合 三 良夫妻

(経済同友会専務理事)

阪本 勇

(住友電気工業相談役)

田淵 節 也夫妻

(野村證券会長)

山下 俊 彦夫妻

(松下電器産業相談役)

かけて競争力と生産性を向上させることができた。また人材の育成、市場の重視、地域への貢献といった点で大きく改善することができた。」と経験を披露した。経済広報センターの居林常務理事は「欧米では経済界の一部が政府や政治家に働きかけて保護主義的政策をもたらしているが、日本でも経済界がこれ以上政府に内需拡大を要求できない事態にきてい。経団連の土光元会長は行革で小さな政府を目指したが、中曽根首相の四百億ドルの内需拡大によって来年には国債の累積利息だけで十三兆円にもなる。経済界だけで内需拡大ができるようにしようというのが経団連の考えである。」と述べた。

四、自由経済、企業活動と道徳・倫理

議論が散漫になるたびに適切な問いを發して、今回の円卓会議に特徴づけと格調をもたらしただのが住友電工阪本相談役であった。まず、数字や統計とは別に国によって競争のルールや価値観が異なるとした上で、「何がフェアか」ということについての意見交換を提唱した。次いで、「自社の或る製品が成功しており、利益を犠牲にしても、自国に競争相手があるために安く輸出が続いている場合、どこかで慈善の心でそれを

止めるという決断ができるだろうか？ 低価格をやめようとしても独禁法に引っかかる。ブレーキをはずした自動車のように止まらないとき、どうしたらよいだろうか？ 欧州では英知が働くようだが、答を聞かせてほしい？」という単刀直入な質問が投げられた。

オランダシェル石油のワグナー会長は「殺し合いも良くないが、独占も又良くない。あくまでも良い品を安く作るのが企業の役割である。ビジネスの倫理については言行一致が重要であり、罰則も含めたルール作りも必要である。長期的には、それが自己利益にもつながるものである」と述べた。

イギリスのクーパー氏は、「イギリスの場合安易にカルテルに走る人が多いが、長期的利益を確保する構造作りが必要である。」と説いた。

松下電器山下相談役は「自由貿易自体は絶対なものでも目的でもない。人類の多くの人々の平和、繁栄、幸せにつながる手段であるから守らねばならないのでもしそれが一部の人々の利益のみに陥ったらたちまち支持を失うだろう。たしかに競争は厳しいが協調が無ければ戦争になってしまう。今こそ道義に基いた競争のルール作り、急務であり、それには

コーが最もふさわしい。」と述べた。ジスカールドスタン氏は必要なのは倫理よりも、むしろ英知であることを述べた上で、IBMは数年前に価格を高く設定し、研究・開発を可能にした上で製品の多角化をはかったことを紹介した。

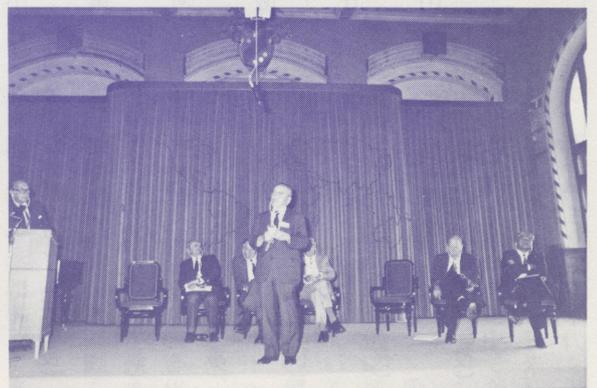
これに関しては、日本ではまだ吸収・合併(M&A)が非倫理的であると受け取られることが多いのに対し、アメリカでは経営者が良い配当をしないことが非倫理的とされるところも浮きぼりにされた。

ジャパン・タイムス小笠原会長は「競争が停止すると進歩が止まるので、その程度が問題。何か抜本的な解決の糸口を、こうしたグループで見い出さなければ、やがて台湾や韓国の代表がこのテーブルにすわって同じようなことを繰り返すことになる。一方、政府やマスコミも緊張を作っているの、それに対処する必要もある」と述べた。

鉄道総合技術研究所の尾関理事長が、「結局自由経済と道義を両立させなければ統制経済を招くことになる」と述べたのに呼応してアメリカスコビル社のモーア副社長は「一緒に協力しなければ、一緒に死ぬのみ」というフランクリンの言葉を引用した。



●円卓会議夕食会。左から、山下相談役、波多野駐ジュネーブ大使、ジスカールドスタン氏(仏)、パントー大使(タンザニア)、松原駐ベルン大使、阪本相談役。



●パネルディスカッションでフロアーからの質問に答える阪本相談役。

五、失業と債務

ヨーロッパ側は失業、特に若者の失業を最大の問題として挙げ、若者の目的の喪失、勤労意欲の衰退、技術者不足などがこれに関連して触れられた。

一方、野村證券田淵会長は「アメリカの純債務が1991年にはGNPの17%にあたる一兆ドルになる。つまり借り上げ金利が800億ドルになり貿易収支の黒字を800億ドルにしなければならぬ。常識的にはこれが可能となる気がしなく、極めて心配である。パックス・ブリタニカからパックス・アメリカナと移り、次にパックス・ジャポニカに移る力も、それを希望する人もいない。これからは皆で共同してパックス・コンソーシアムといった形でいくしかないのではなからうか？」と今後の世界の金融の動向に示唆深い提言をした。

六、継続的なネットワーク作り

ジャパン・タイムス小笠原会長は最後の夕食会で「我々昨年の日本側参加者は一年間に三回集まって意見交換をした。継続が重要で、来年再会するまでに各地域ごとに会合をもってはどうか」と提案した。アメリカのシンクタンクの草分けSRIの創設者の一人でこれまでに何百回と

いう国際会議を企画したギブソン氏は、「この円卓会議の趣旨である道義を基盤とすることを徹底し、個人個人の連絡を密にして自由な形でネットワーク作りを続けていくのが最も効果的だ」と述べた。

今年5月の日本のキャンペーンへの欧米参加者から、きめ細かい対話の場や工場や現場での意見交換も含めたプログラムが、日本のより深い理解に不可欠であったとの意見が相次ぎ、アメリカの参加者からは来春アメリカで同じようなキャンペーンを計画したいとの提案がなされた。

こうして昨年よりはるかに和やかな雰囲気、信頼に満ちた自由な意見交換ができたことについて提唱者の一人オランダのフライリップス氏は次のように評価した。

「船が浸水が始めているのに答えが見つかからない。何とかしようとの会議を呼びかけた。大恐慌やヒットラーの抬頭を経験したものとして、互いに批難し合うのではなく、「同じ船」に乗っていることを認識し合う必要を感じた。人間の知恵だけでは解決できない問題に対して創造主のインスピレーションを活かしていけばよい。互いの心配や考えを語り合うことは素晴らしいことで、この一年間に起こった進展状況に満足し、

希望をもつことができた。



●円卓会議ティールパーティーで談笑する右から田淵夫人、中野夫人、山下夫人、フライリップス夫人。



●円卓会議夕食会で日本を代表して挨拶する小笠原ジャパン・タイムズ会長。「継続」の重要性を強調した。



●夕食会でお得意の奇術を披露するネビル・クーバー氏(英国)

コーで味わった新鮮な驚き

田淵節也

清々しい空気

コーの円卓会議から帰京した翌日の夜に、中曽根総理を囲む夕食会があった——これは中田会という名称の、七・八年前から続いている歌を歌う遊びの集いなのですが——私は幹事役の立場上この夜のために、スイスから真っ直ぐ帰ってまいりました。因みに、中曽根さんは歌が大変お上手で、その日はお得意のシャンソン「枯葉」、或いは「群青」と幾つも歌っておられました。

私は中曽根総理に、「貴方は昭和二



田淵節也 (たぶち・せつや) 1923年生まれ。京都帝国大学法学部卒業後、野村證券(株)に入社。1978年取締役社長就任。1985年取締役会長に就任、現在に至る。この間、野村證券が利益日本一の、しかも世界の金融市場のリーダーとしての会社に成長する推進役を果たした。一方経済同友会副代表幹事、前川委員会委員、経済審議会委員などを務め、新しい経済・金融政策を提唱するオピニオンリーダーとしても活躍している。

十五年スイスのコーに於けるMRA大会に出席されていますが、そのコーに私は今回初めて行ってまいりました。」と報告致しました処、総理は相好を崩して喜ばれて、思わず二人でがちりちりと握手をした次第です。昭和二十五年といえば、未だ日本が世界から国交を断絶されていた時期であり、そうした環境下でコーに招かれたことは、青年国会議員であった中曽根総理にとって、さぞや希望に燃えた旅立ちであったであろうと拝察致しました。

MRAやコーの財界人円卓会議について、私は今回初めて識ったので

すが、これは私の畏友住友義輝君の奨めによったものです。住友君とは、戦争中京都大学学生の時、旧帝国海軍と一緒に召集されて生死をともにした仲で、従ってお互いに、時に頼み事をし、頼まれたことは断われないといった間柄です。そんなわけで、兎も角家内と連れだつてコーに出席することにしたわけですが、行ってみて正直本当に驚きました。久し振りに味わう新鮮な驚きとでも申しましようか。

自分のことは自分です。そしてボランタリー。親切。誠実。全く清々しい空気でした。

難民仏教僧との出会い

二日目の昼食のとき、カンボジアの難民部落(ベトナム軍から逐われた、カンボジア難民のための、タイ領難民部落)の仏教僧とテーブルが一緒でした。黄色の僧衣をまとったこのカンボジアの仏僧は、テーブルについてみますと、昼食は十二時以前に済ませて、十二時以降は食事をしないことにしている、即ち一日二食とのことでした。全く本来的な仏教の戒律を守って、難民部落の秩序の指導をしていると、



●日本と東南アジアとの懇談会でスピーチするカンボジア難民キャンプの仏教僧。

祖国のために懸命に働いている姿そのものでした。そういう立派な人達が沢山努力しているにも拘らず、インドシナ三国は戦乱の泥沼から抜けられない、人間の業とも言える悲劇に対してつくづく考えさせられました。

流れるMRA精神

欧・米・日の経済人による円卓会議は、色々な意味で大変面白かった、というのが私の実感です。所謂、世界経済に関する国際会議なるものは、毎年世界各地で何度となく開催されており、貿易摩擦、累積債務、為替変動、産業構造変化、エネルギー問題、多国籍企業の在り方等々、会議の種は尽きることがないからで

す。従って、コーのラウンド・テーブルは、それ以外の国際経済会議に較べて、何か特徴がなくては意味がありません。私の興味と期待も、この点にあったわけですから。

先ず発言が自由で、平等で、自らの思っていることを、随時何でも言える雰囲気であったこと。(特に同時通訳が立派であった)

デイスカッションの底流にMRAの精神が流れていて、例え議論が堂々巡りをしてまともならなくても、その答えに対する英知のようなものがみえてきたこと。

企業の社会的責任、或いは国際社会的責任がなくては、二十一世紀に於ける資本主義経済は成立し得ないという認識を、MRAが先取りをしていること、等々が、円卓会議に出席させていただいた感想であります。コーから下山して、ジュネーブの高級ホテルに一泊しました。ホテルのアシスタントマネージャーが、「何処から来たのか。」と聞くので、コーからだと言った。きよとんとした顔をしていました。「すぐ近くのCAUX」と言っても知りません。我が社のジュネーブ駐在員も全く知らなかったと言います。道徳再武装も楽ではないなと思えました。

世界の将来を論じる 若者達との一ヶ月

田頭寿恵

スイスのコーに到着し、古くて大きなマウンテンハウスの前に立つと、今日からここで一ヶ月間生活するのだという自覚がわいてきました。部屋もとても素敵だったので感激しました。しかし、翌日からは大変な日々を送ることになりました。青年会議に途中から参加し、英語も殆んど聞きとれないまま分科会に入りました。少しでも聞きとろう、理解しようとする精神を集中させっぱなしなので夜はグツタリという日々が続きました。同年代の人なのに外国の人に話しかける勇気がなく、名前を聞くことさえためらってしまいました。何日かが過ぎ、私の入ったクッキングチームの人々と少しずつ話ができるようになっていきました。料理をしながらドイツの唄を教えてもらったりお返しに日本の唄を教えた

りました。青年会議のりに各グループ別に発表するための相談をしているうちに同年代の人とも仲よくなれました。お互い意見を出しあうことによって連帯感が生まれ、仲間意識を深めることができました。発表記念の写真を撮る頃には、皆ともすっかり仲良くなり、別れるのをとてもつらく思いました。

私が青年会議で感じたことは、私と同年代、或いは年下の人達ですら、自分の将来や世界の将来ということについてとても深く考えているということ。私はそれに大変驚き、かつ何も考えていない自分を恥かしく思いました。彼らは学生であっても、社会人であっても、将来自分が進む道をしつかりと決めて、それに向かって努力しています。私もその一人ですが日本の学生の大部分は、

なんとなく学校へ行ったり、皆が行くから自分も大学へ行くといい風潮に染まっていると思います。これは日本が経済大国となり、一般の人々の生活が豊かになったからでしょう。ハングリー精神というもの。私達は忘れてしまったように思います。大学受験を経験していない私は、今まで人一倍なまけた生活を送っていました。コーに行つたことによつて、このままの人生を送ってはい

けないと痛切に感じました。

アジア会議の時にもう一つ考えさせられたことは、日本以外のアジアの国々が、日本に対して持っている気持ということでした。日本はアジアで一番の経済大国、先進国です。日本人は多かれ少なかれそのことに自信を持っています。他のアジア諸国は、日本に追いつけ追いこせとばかりに無我夢中で経済成長を達成しようとしています。戦後、日本がアメリカに追いつこうと高度経済成長をしていった時のように、日本をライバル視していると感じました。彼らの自意識の強さというか、愛国心の強さに感心させられました。皆、自分の国を愛し、誇りを持ち、国のために一生懸命仕事をしています。日本では忘れかけられたことかも知れません。

今回の会議に参加したことによつて、多くのことを学びました。数多くの国の人を知ることにより、自分の国のことを客観的に見ることで学びました。八年間も英語を学校で学びながら、ろくに電話一つかけられないという事実を恥ずかしく思いました。もっと英語力をつけて、是非もう一度コーへ行きたいものだと思います。

(日本女子大三年)

コー円卓会議に参加して

—問題は日本から米国へ—

阪本 勇



阪本 勇 (さかもと・いさむ) 1911年アメリカ生まれ。京都帝国大学工学部卒業。日本電力(株)勤務を経て1942年住友電気工業(株)入社。1969年取締役社長。1973年取締役会長。1982年相談役に就任、現在に至る。関経連国際交流委員会委員長として、多くの国際会議やミッションで関西財界のスポークスマン役を務めた。

「西欧諸国での日本の評判が余りに悪く、このまま放置しておいては日本は世界の孤児になってしまう恐れがある。MRAとして何か為すべきことがあるのではないか」というオランダの世界的企業のフイリップス社元社長のフイリップス博士の提唱に基いて日米欧財界人円卓会議がイスのコーで開催されるようになり、今年の会議はその第二回目の会合でありました。

今回の会議のテーマは次の四つでありました。

(一) 産業は自らを正すと共に、いかにして政府に対して建設的な影響力を与え、かつ国際競争の公正な条件作りをさせることができるか？

(二) 相手方に対する否定的なパセプションに対して、実際にその間違いを正すと共に誤ったイメージを是正するという両面から、いかに対処すべきか？

(三) 共通の道義的・精神的基盤に立った経営者の世界的なネットワークを如何に強化することができるか？

(四) いかにして新しい国際的企業戦略をうち立て、発展途上諸国と共に或いは発展途上国におけるジョイント・アクションをとって行くことができるか？

昨年の会議参加者にうかがいますと、初めのうちは激しい日本批判ばかりで、或る人の感想では、まるで地獄の責め苦にあっているようであったと聞いていましたので、今回も一層そうした所謂『ジャパン・バッシング』があるのではなからうかと危惧の念を懐いて出席したのであります。が今回は意外にもこういう日本批判は全くなく、各人それぞれ自国なり自国民のやり方を責めるような発言が多く、かえって肩すかしにあつたように思いました。

人は誰でも外国へ行くと愛国者になるとよく言われますように、私もこうした会合に出るといつい日本擁護の主張をする傾向があるので、この会合ではこうした態度は捨てて虚心胆懐に皆さんの意見や忠告を傾聴して来ようという心づもりをして出かけたのであります。そういう意味から言いますと、いささか拍子ぬけの感があり、がっかりしたというのが正直な私の気持であります。

後からMRAの幹事役の人から聞いたところによりますと、会議の進め方の下打合せの時にお互いを批判し合うような議論は不毛でよい結果をもたらさないからもう止めようではないか。もつとMRAの精神に立脚した高尚な討議をしようということに一同の意見が一致して議題とその進め方が決定されたとのことであります。

そういう配慮のせいでしようか日本人の誇りとしている勤勉・節儉・規律等の徳目をほめる人が多くこれを批判する人はありませんでした。ただそれが独りよがり他人に迷惑をかけるならば美德とはいえないと茶話の時に私に囁く人があり、大いに反省させられました。自由貿易・自由市場主義こそ最善と説く日・米の行き方に対する欧州人の持つ考え方の一端を知った思いがしました。

議題の(三)に関連して、昨年は日本が問題であったが次は米国が問題である。来年もこの会議を続けるのな

らば、今年五月に日本で予備会談をしたように、事前に日・欧から米国へ出かけて行き米国の数都市で準備会談を持つべきであるとの提案があり、大多数の人が賛成しましたので、恐らく改めて正式の提案があるものと思います。ただ其の際通商摩擦については同種の会議が多くありますので、重複した目的を持つ会議は避けようではないかというのが大方の意見でありました。

企業モラルと社会的責任

つぎのことは会議と直接関係のないことですがローザンヌ大学商学部が求めている(一)あなたの会社には倫理綱領がありますか。(二)倫理委員会がありますか。(三)あなたの会社で今最大の倫理問題は何ですか。(四)次の三つの事件に対する意見は？(イ)東芝事件(ロ)フォルクス・ワーゲン事件(ハ)ボスキー事件。

他の人にも同様の質問をしているとの事でいづれ印刷物として発表する予定であると言っていましたのでそれが送られてくるのを興味を持って待っております。若い大学生が企業の社会的責任に対して関心を持つ

ていることに感心すると共にスイス社会に今またこうした論議の高まりがあるのであるのかと考えさせられました。

わが国でも七〇年代の初め頃公害問題に触発されて企業の社会的責任や企業モラルが盛んに討議されたことを思いおこしますが、もう一度われわれも初心に立ちかえって再考せねばならぬと反省しました。

G5以来、円の価値が上昇して一四〇円代となり、近い将来には一〇〇円位になると予測する専門家もいます。曾ては一八〇円が採算限度であると言われていたのが一五〇円位ならばやって行けるという企業が増えて来ました。その方策は合理化であり、海外立地であり、輸入増であります。しかしこうして企業が努力して効果を上げて行けば、再び円高となつて行き、またまた一層の努力が強いられることになりません。これは一種の蟻地獄ではないのでしょうか。何か別の対策を構じなければたとえ今問題となつている日米欧間の通商摩擦が解消しても、次は新興工業国との間に同種の紛糾がおこるに違いはありません。

コーで過ごした

一ヶ月



三浦 幸

今回、スイスのコーで一ヶ月、家族や友人から離れて、初めて出会った人々と共に過ごしたことは、自分を見つめ直す良い機会だったと思います。コーは何かを深く考えることが出来る場所でした。日本では「日々の生活」に追われて、時間を無駄に使ってしまうことが多々あります。もち論コーでも、やるべきことを自ら探していかなければ同様に無駄に過ごしてしまい何も得ることができないでしょう。しかし、「自分にできる事」を自ら発見し、それを遂行するならば、自分にどんな力があるのか、また、己の無力さをも知ることが出来るのだと思います。そうした一つ一つの発見が、自分を見つめ直すということにつながってゆくと思いま

す。

様々な国々から来た人々と話し、色々な考え方や、私と同年代の若者達の考えを知ることもできました。外国人のルームメイトとも、辞書を片手に色々なことを語り合い、私達と少しも違わない面や、逆に全く異なる面があることも知りました。国や言葉の異なる二人が寝食を共にし、深く理解しあえたことは私にとって大きな喜びでした。

また、韓国の方々のお話を大変興味深く拝聴しました。戦争を知らない世代の私にとつて、韓国の方々の話された戦争の真実は大きな衝撃でした。さらに、その問題を受けとめるには、私は余りにも無知でした。私はその無知を恥じると共に、事実を知ることが必要だと思いました。或るミーティングで誰かが「コーでの生活のあと、自分の国の自分の世界に帰ると、その違いに失望するかも知れない。しかし、コーで発見し、決心したことは決して無駄にはならないのだ」と言っていました。私も前回の訪問のあと、日本に帰ってそう感じることもありましたが、今回、再び参加してみて、自分が気付いたことは決して無駄ではなかったのだと、改めてそう思いました。

(大妻女子大一年)

道義を基盤とした自由貿易

尾関雅則

コーでの安らぎ

八月二十四日から二十八日まで、昨年が続いて、夫婦で二度目のコー参加を果たしました。

今回は、小生の不注意による不慮の負傷が重なったこともあり、コーの静けさ、人々の善意、よくゆきとどいた配慮等々……本当に身にしみて有難いと感じました。そこには、丁度我が家に帰ったような安らぎがありました。こんなことはコー以外



尾関雅則（おぜき・まさのり） 1924年生まれ。東京帝国大学第一工学部卒。日本国有鉄道に入社。電気局長を経て、1975年常務理事（首都圏本部長）就任。この間、みどりの窓口のシステムを開発・導入する。1979年日立製作所入社。取締役O A 事業部長などを経て1983年常務取締役就任。1987年、国鉄の民営分割化によって設立された（勸）鉄道総合技術研究所の初代理事長に就任、現在に至る。情報処理学会会長も務める。

ではとても考えられないことです。理屈をこえた、MRA精神のあらわれに、深く感銘を受けました。

円卓会議は、昨年とうって変わって、日本叩きは影をひそめ終始率直な意見の交換がなされました。昨年は初対面だった人々も、多くはその後二度三度と会う機会があり互いに理解が進んだことが、大きく寄与しているのでしょうか。就中、今年五月の御殿場会議を中心とした米欧の代表の日本訪問は大変良い影響をもたらしたようです。多くの方々からその際の

ホスピタリティに対して、御礼を言われしました。誠心誠意でなされる人と人との交流が、いかに大きな力を持つことが出来るかを目の当たりにして、一層、確信を深めることが出来ました。

ECの統合

会議における議論のうちで、心に残ったものの一つ二つを申し上げます。ECの統合が着々と進んでいることが、第一に上げられます。中でも欧州の統一通貨が制定され、それが使われ出すと言う、ジスカールデスタン氏の発言は、何も知らなかった、小生にとって大きな驚きでした。第二には昨年も大変議論になった第三世界の問題です。発展途上にあるこれらの国々の経済発展を刺激して、新しい需要を喚起すれば大きな市場が得られると言う主張です。さらに、この円卓会議とMRAの関係を、いつまでも曖昧にしておくのはよくない、否、それでいいのだというようにやり取りも、相当活発に行なわれました。また昨年とは違い米国にも問題があるのではないかと言う意見が強く出され、この次は一度米国でこの会議を行なうべしという声が出ました。

産業の責任

円卓会議の終わった次の日に開かれたパネルディスカッションでは、阪本氏の一本筋の通った主張が圧巻でした。その要旨は、産業は富をもたらすことによって、人々に幸せをもたらしてきた。これは新大陸の発達史を眺めれば明白である。産業は、原材料、施設、給料及び税を、インプットとして投入し、アウトプットとして、製品、不良品、及び公害と呼ばれる、汚染物質をつくりだしてきた。近年、産業の規模が、大きくなるに比例して、汚染も年々増大し人々の安全をも脅かすにいたり、アンチ産業主義とも言うべき論が行なわれるようになったが、これは本末転倒であり、産業の元を枯らしてしまつて、産業を衰退させる様な事をしたら、それは人々に大きな不幸をもたらすことになる。アウトプットのうち悪しきものの第一である不良品は、ゼロデイフェクトにより克服された。より重大な汚染の問題も、日本では公害防止の努力により改善された。今後の産業は倫理に基づく営為によって行なわれなければならないと言う論旨でした。いささかの反論めいた質問もでしたがそれに

も実に明快な解答をされました。

最後の夜、MRAの創始者フランク・ブックマン博士のメモリアルルームである四百十五号室で東芝の方と一緒に聞いたイギリスのエイガー氏の話は大変印象的でした。同氏は、長年世界で労働運動の指導に携わってこられた方で、欧州では日本でもとも考えられないぐらい複雑な東西南北の、国際政治の駆引きの一部として、労働運動もとらえられて行かなければならないという現実を実感させられました。

以上のコーで得た諸々の情報からこの一年の変化は、実に大きなものがあり、政治、経済の全世界的な、仕組みが、その底流において着実に変動し続けていることを、痛切に、実感させられました。それを簡単にまとめると、次のようなこととなります。

即ち、ECの統合化が確実に進んでいるように自由世界の経済が大きくなって、国境に象徴される政治の枠組みを越え始めた。多くの多国籍企業の増加が端的にこの間の事情を物語っています。我々がもし今後、自由経済体制を認めてゆくのであれば、公正な競争が成り立つ基本条件として、お互いに強力な競争相手が必要であります。そしてフェアな競

争の結果、づから、一定の秩序が

生まれることが好ましい。それは、各々の国が、それぞれの個性に基づいて行なう、世界分業の体制でありましょう。各自が、自由な意思に基づき、公正に競争した結果が自動的に、このような分業体制の創造につながるのが、理想ではないでしょうか。更に、市場を広げ、新しいマーケットを創造して行くことも肝要であります。そして、その方向には、発展途上にある第三世界の国々、また中国を初めとする共産圏の人々が、大きな潜在需要を抱えています。またソフト、及びサービスといった新しい製品も、大きな市場になる事でしょう。

自分で意識はしていなくても、既に世界の大国となつてしまつた日本は今までのように、ただ奇麗に使えばいいと言うだけでなく、横綱の様に汚い勝ち方は、最早、許されないのでしよう。「自由は道義を基盤にのみ成り立つ」事を今や銘記するべき時ではないでしょうか。

更には、これを人間と人間の間のコミュニケーションネットワークによって広めて行くことしか、途はないのです。

東芝労使代表団 11回目のコー訪問

—産業人会議に参加—

東芝労使代表団のコー訪問も十一回目を迎えた。勤労部川崎担当部長、東芝労組安藤副委員長をはじめとする合計6名が参加したが、特に今回の産業人会議が、「企業文化の改善」というテーマであったこともあって、これからの企業のあり方についての率直な意見交換に大いに役立つことになった。

「COCOM違反事件後の難しい時期に、謙虚な姿勢でわざわざ参加をされたという姿勢に共感を感じるとヨーロッパの参加者が述べたのをはじめ、こうした問題で危機を招いた時に、社会に対する企業の責任の取り方が国によって異なることも、話題になった。

円卓会議の中で、ある日本側参加者が「日本では他人や部下がした失敗であっても、責任遂行ができなかったとしてトップが責任を取ることがあるが、これは名誉を尊ぶ姿勢を示すという意味でもあってプロセスを重視するという日本式の考えでもある」と述べたのに対し、アメリカの参加者から「自由世界の一員としての責任を忘れたのは許されないが、それを貿易不均衡の問題と混ぜ合わせてアメリカが感情的になってはならない」というコメントが出された。別の日本人参加者は、「日本でモラルや人間教育を重視する会社でも、時々失敗が起きるのは、組織が独り歩きするからであり、常々会社が新入社員に説くことを、その後もより頻繁に徹底し、従業員の中で実際に活かされるようにしなければならぬ。これからの企業はモラルを基盤にしなければ生き残れない。」と述べた。

東芝労組からも、労組独自で再発防止のための調査と対応がなされているとの報告もされ、この労使代表の参加が、単に一企業だけの問題ではなく世界の産業界全体としての「企業文化の改善」の模索に大きな貢献となった。

スナッフ



●日本初の海外広報講座を開設した神奈川大学松岡紀雄教授によるレクチャー。各国のジャーナリスト、学者、ビジネスマンなどが熱心に耳を傾けた。



●韓国代表七名のうちの朴女史(圓仏教指導者)



●ナイジェリアから参加したイスラム教と部族の指導者。



●東芝代表団を代表して挨拶する川崎勤労部担当部長。



●スイスの自然を楽しむ日本の青年達。

MRA中南米キャンペーンに 参加して

兼松 恵



希望を求めて国境を越えてきた人々
—日本の果たすべき役割—

去る三月から四月にかけて、ブラジル、アルゼンチン、コロンビア、グアテマラで、海外十一ヶ国より三十六名を迎えて行なわれたMRAキャンペーンに、唯一人の日本人として参加した。この地域の国々が直面する難しい問題の解決への道を求めて、自分たちの人生を新しい国作りのために捧げている勇氣ある人々の姿に強く心を打たれた今回のキャンペーンであった。

ブラジルのサンパウロでは、この国の産業界のパイオニアの一人であったピラレス社の創始者ピラレス氏の未亡人が「この国の将来は私達の生き方次第です」と全国に呼掛け、政界、財界、労働組合から百人をMRA午餐会に招いた。それはブラジルの将来を共に担っていくことを約束しあう素晴らしい集いとなった。元ブラジル経済連合会副会長ジョネス・サントスネーベス氏は「社会を変えるためには人々の心の改革が必要で、自分が変わることによって社会に変革がもたらされます。必要な道具は我々の心の中にあるのです」と語った。ブラジルではこのほかM

RA一般集会在二回開かれサルネイ大統領の経済復興審議會を構成する十四人の委員のうち四人のメンバーが集会に出席した。

グアテマラの人口八四〇万の約七割はマヤの未裔インディオが占めている。彼らは1524年から三百年間もスペインの植民地として、それ以降も独裁政権、軍政、左翼、及び右翼による度重なる内乱の中で虐げられてきた。1985年の民政移管後、定数百名の議會に八名のインディオ代表が選出され、昨年にはインディオ初の女性議員（アンナマリア・シュウヤ）が誕生した。彼女は今回のMRA會議主催者の一人である。

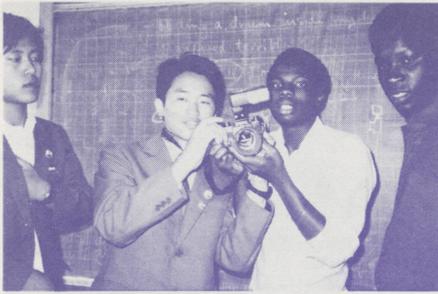
セルゾ・アレバロ大統領に迎えられたMRA代表四〇人の中にはカナダのインディアン代表二名が加わっていた。

国土の三分の二が山岳地帯で火山や火口湖も多く、労働大臣の協力を得た今回の會議もアテイトラン湖畔のパナハキル村で開かれた。百人を超す参加者の中には、何千人という戦争孤児や未亡人を抱えている地域から来たインディオの指導者もいた。

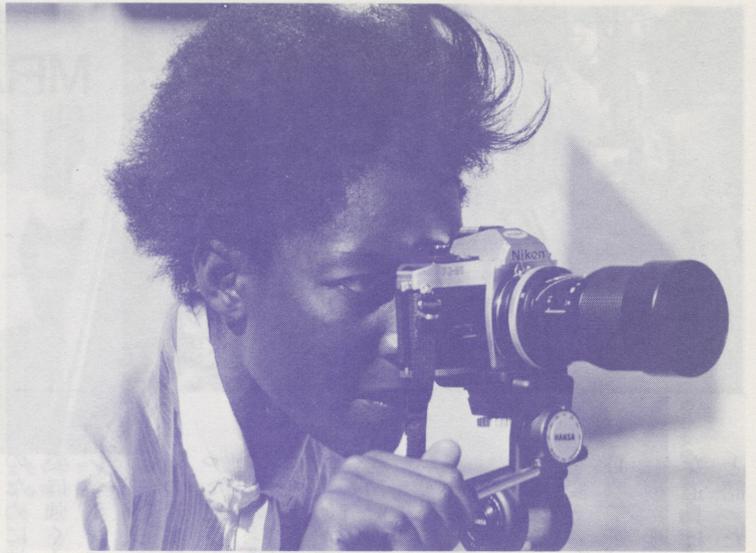
現在もこの湖の近辺ではゲリラが活動しているとのことだった。メキシコ、コスタリカ、ニカラグア、ホンジュラス、そしてエルサルバドルからは二十六名が参加した。中米の平和と新しい国作りへの希望を求めて国境を越えてきた人々だ。グアテマラの弁護士ガルシア氏は「MRAとは私達の社会に許しの種を蒔くことである。一人一人が自分の経験を分かち合うことによって、同じ国民同士、そして海外からの参加者とも兄弟となれる」と語った。ある組合の人が「我々が一番望んでいることは貧しい小国であっても世界の一員として尊重してほしいということだ。大国に都合の良い経済援助だけでなく、私達の国作りに正しい理解と協力を示して欲しい」と訴えていたのが心に残った。

私自身、行く先々で、日本でも大勢の人々が中南米に関心をもっていることをお話することが出来て、中南米の方々に本当に喜んでいただいていた。中南米ばかりでなく、アジア、アフリカ、中東で続いている戦争、飢えと貧困、そして先進国の失業問題などに対して日本が果たすべき役割について学んでいこうという決意と共に帰国の途に就いた。

(関西MRA世話人)



寒河江 亮



青年海外協力隊員として

アフリカ・ザンビアで 過ごした2年間

(その4)

ザンビア式披露宴

現地訓練から帰って暫らくのち、初めてザンビアの結婚式を観た。日本の贅沢な結婚式と比べたら質素で、カップルが天井から舞い下りて来ることもないが、手作りの良さが生きている。新郎新婦の姿が頻繁に消える会場で、黙々と飲み食いしなければならぬどこかの国と違って、ここでは二人を中心とする温かな輪の存在を強く感じることができた。祝うという行為の原点は、当事者以外の人たちがどれほど本心から嬉しく思うかにあるのだということがよく分かった。うわべの義理だけではとてもここまでの一体感ではでない。

教会での厳肅なセレモニーが終わると、いよいよ披露(疲労?)宴の始まりである。カラフルな風船を沢山付けた車が、クラクションを賑やかに鳴らしながら教会から帰ってくる。対向車もヘッドライトを点滅させてカップルを祝福する。会場を揺るがさんばかりの激しいディスコミュージックと、司会者のディスコジ

ョッキー風の軽妙な語りに乗って、新郎新婦、それに介添え役の美男美女(これ本当!)総勢十名がまる

でプロのダンサーのような軽やかなステップを踏みながら入場してくるオープニングは圧巻である。どうやらこの場面が重要な見せ場の一つらしい。リズム感とスタイルに劣る日本人には真似の出来ないキメ方だ。喜びのエネルギーが体中から溢れている。仲人に手を引かれ、神妙な表情で入場してくる日本人と何と対照的なことか。しめっぽいな雰囲気など全く感じられない。来賓の挨拶が終わると、いよいよ「大ディスコ大会」が始まる。老いも若きも男も女も次々と飛び入りで即興ダンスを踊りまくる。昔、日本の田舎の結婚式で鼻メガネに口髭をつけたおばさん達が滑稽な踊りでその場を盛り上げていたのを見たことがあるが、あの十倍位のエネルギーを感じる。太鼓の乱れ打ちならぬホイッスルの乱れ吹きに興奮も一気にピークに達し、私の血圧も上昇する。

仲人らしき女性も日本のように上座でニコリともせずにかしこまっているのではなく、自ら先頭に立ち、まるでインディアン雄叫びのような奇声を「あわわわわー!」と発しながらフィーバーしている。よく見るととても美しい女性だ。こんな美人がどうして「あわわわわー!」なのかと最初はビックリしたが、考え

れば彼女には仲人として座を盛り上げる大事な役目があったのだ。つまりしている訳にはいかないのだろう。あれほど美しい女性なら内心は相当恥ずかしいだろうと勝手に想像した私は、褐色の肌、玉の汗を浮かべながら大熱演を続ける彼女の姿に感動した。

首都で生活していると、ザンビア人の生の姿を見るチャンスは少ないが、その日は褐色の肌の下に秘められた煮えたぎるようなアフリカの血とエネルギーをまざまざと見せられた気がした。天分とはこういうことを言うのだろうか、ザンビア人の唄と踊りのセンスにはいつも驚嘆させられる。トラックの荷台の上で、バスの車中で、たまたま乗り合わせた人々が自然発生的に唄い始めることも日常茶飯事である。それも完璧にハマっているのだから恐れ入る。さて、カメラをぶらさげていたのを見つけられ、是非写真を撮ってくれと頼まれた。フィルムを日本に送って現像したり色々面倒なので普通は断ることにしていたが、一生に一度の晴れの門出にカメラマンさえ頼めない彼らが気の毒になって引き受けた。本当はタダでもよかったが、それでは失礼だと思ったので実費だけは頂くことにした。非常に質素な

披露宴で特別な料理や高価な酒が出る訳ではないが、幸福そうな二人の顔を見ていると、幸せの度合いは決して遣ったお金の額で決まるものではないことが分かった。気持ちの込め方一つでこれほど清清しく祝ってもらえるのだ。見物人の私にもザンビア風チキンの唐揚げ（徹底的に揚げて水分を抜くので堅い！しかし、旨い）や飲み物を勧めてくれる。それを頼張っているうちにウキウキとしたいい気分になってきた。いつまでも幸せにネ！

さんたん 惨憺たる初講義

四時に目が覚めた。登校拒否児童の心境がよくわかる朝だった。ビスケットとコーヒの朝食もほとんどのどを通らない。やることは全てやったのだからと自分に言い聞かせ、意を決して教室のドアを開けた。緊張で顔がひきつっているのが良くわかる。動きも油の切れたロボットのようになごこない。自己紹介はなんとか切り抜けていよいよ初講義のスタートだ。黒板の前に立って、何週間も前から準備していた自作のテキストを読み始める。熱心に書き留めている学生もいれば、隣とペチャク

チャお喋りしているものも。このクラスは全員ザンビア人で、最上級の生のクラスだ。一語一語できる限り丁寧に発音しているつもりだが、どの位通じているものやら全くわからない。そのうちに、自分でも何を言っているのか分からないほど早口になってきた。案の定、黒板に書いてくれと学生達。大切な箇所を書こうとするが、チョークが信じられないほど簡単に折れてしまって上手くいかない。ポキポキポキポキ。長かったのが忽ち小指の先程になってしまふ。きつとロボットの手のような物凄いい筆圧がかかっているのだろう。黒板消しを冷静に使える心の余裕もなく、手のひらでゴンゴンやる始末だ。ゴシゴシゴシゴシ。ふと我に返ると、講義のことなどすっかり忘れてその作業に熱中している自分を発見し愕然とする。一体私はどうなってしまったのか。「落ち着け、落ち着くんぞだ！」と自分に言いよせさせる。学生達の突き刺さるような視線を背中に感じる。単語の綴り間違いを何度も指摘される。惨め。両腕がコンクリートのかたまりのように重く感じられる。ときどき、ブルンブルンと回さないととても書き続けられない。時折背中から聞こえてくる笑い声。もしかして自分が笑われている



●美人揃いの付き添いの女性達。



●自分の教えた学生の結婚式で。拳式直前のスナップ。

のかと思うといても立ってもいられない気分になって、どこにも持って行きようの無い悔しさが込み上げてくる。被害妄想だということは分かるのだがどうしても感情をコントロールすることが出来ない。一体自分が何をやっているのかさえポツとして分からないままに、予定の二時間が過ぎたらしい。終了と同時に「起立、礼」もない無言で教室を出ていく生徒達。それがこの流儀なのだろう。シーンとした教室に一人ポツンと残り残された私を中空から見ているもう一人の自分……。その時の私の心象風景を言葉にするとこうなる。突然おかしさがこみあげてきたり、自分で自分に頑張れとつぶやいたり。あれはノイローゼの初期症状だったに違いないと、私は今でも強く信じている。

何でもハイと 言ひなさい!?

私はジャーナリズム学部配属されたのだが、科学学部の学生達にも写真を週四時間教えて欲しいとの依頼がきてると、アブラハム部長から言われた。自分の学部のことだけでも頭が一杯なのに他の学部の応援とは気が重かったが、結局、ノーと

なかなか言えない性格の私は引き受けてしまうことになる。これが大失敗の始まりだった。科学学部のやはりインド人のレイ部長は、うちのアブラハム部長以上の曲者だった。第一、私がザンビアに配置される数か月前から応援を依頼しておきながら、今まで何の準備や連絡もせず、最初の講義の始まる五分前にシラバス(講義要項)を私に手渡しして平然としている。確かに、カラスライドの製作から顕微鏡写真に至るまで様々な分野の写真技術が網羅されている立派なシラバスだった。だが、その習得に欠くことの出来ないフィルム、カメラ、薬品類、引伸機、ペーパーテキスト類は全く用意されていないかった。顕微鏡も無いのにどうやって顕微鏡写真を私に教えると言うのか(もっとも、あつてもやったことがないので教えられないが……)とにかく相当軽く扱われているのだということはよく分かった。「ここでは文句を言わず、とにかくハイハイと返事しておいてそのまま放っておくのが一番良い方法だ」とバキスタン人の講師が耳打ちする。日本では経験したことのない精神的な疲れを感じた。おまけにこのクラスは非常にタチが悪く、後々まで様々な問題に悩まされることになる。

さてその晩の十時頃、自分の部屋で翌日の講義の準備をしていると、廊下を隔てた真向かいの部屋に住むザンビア人の男が、ラジカセでディスクミュージックをホテルじゅうに響きわたる音量でガンガンと鳴らし始めた。うるさくてとても明日の準備どころではない。暫らく耐えていたが我慢できなくなったので、一緒に文句を言いに行ってもらおうと、その男の隣室に住むやはり協力隊員で電子機器が専門のKさんの部屋を訪ねて驚いた。やはり頭にきたKさんが専門技術を生かして妨害電波(?)を出す準備をしているではないか。茶目っ気のあるKさんらしいやり方だと思わず笑ってしまった。コンセントをいじると「ブーンブーン」と大きな雑音がラジオに入る。その度に男は驚いてボリュームを下げるが、雑音がなくなると前にも増してボリュームを上げ、男は一步も引く気配はない。まさか敵が壁ひとつ隔てたところでゴチョゴチョやっているとは夢にも思っていないだろう。これがそろそろ夜中の十二時になろうというホテルでの話だからザンビアは楽しい。とにかくさつきより賑やかになってしまい明日の準備どころではなくなったが、これはなかなかの見もの、いや聞きものである。この



●薬品調合の実習をする学生達。



●講義中の一コマ。

勝負どうなることかと固唾を飲んで見守ったが午前二時頃とうとうKさんが睡魔に襲われてダウンしてしまい男の粘り勝ちに終わった。いや、男も何がか理解できずに精神的に疲れたはずだから痛み分けと言うべきか。どちらにしても、この深夜にここまでして音楽を聞きたいという男の執念は称賛に値する。ああ、明日の講義どうしよう……。

援助する側 される側

今日、学校の職員専用のティールームで様々な国籍を持つ講師達と話していたら、ザンビア人の講師が聞き捨てならぬことを言い出した。色々なものが不足していて講義を進めるのがなかなか難しいと私がグチをついこぼすと、機材がなくてあんながそんなに困るのなら、最初から全部日本から持ってくるべきではなかったのかね」と堂々と、そしてまるで他人ごとのように主張しはじめた。「ちよつと待ってくれ。本気でそう思っているのか？」と問うと、「貧乏な他人（ザンビア）が困っていたら、金持ちのあなた（日本）が助けるのは当たり前のことだろう」と言う。「確かにそれはその通りなのかも知

れないが、大切な事が抜けているような気がする。自ら努力する気はなく、常に他人（日本や他の援助国）の懐ばかり当てにしているのは如何なものだろう。私達は単に物を持つてくるという目的でこの国に来たのではない。第一義的には技術の移転が目的である。そもそも機材に關してはザンビアが準備をするという取り決めになっている。努力した上で、なお足りない分の協力は惜しまないが、高価な機械よりもまず自助努力の精神があなたの国に最も必要とされているのではないだろうか」などといふムキになって、まるで協力隊のスポークスマンのように反論したのだが、全く聞く耳を持たない。「何十年間も援助を受け続ける」と、それが当たり前のような気がして来て、感覚がマヒしてしまうんだよ」と、傍で私達の話をしつと聞いていたインド人の講師が耳元で囁く。同期の音楽教師隊員も公式ミーティングの席で、なぜピアノを持ってこの国に来なかつたのかと責められたと聞いた。私達を後ほど日本からくるであろう機材の付属物だとも思っているのだろうか。（本場にそう考えている人がいる事を、後にいやというほど思い知らされることになる）

（次号に続く）



「MRAの歴史」のビデオ(VHS)

ができました。貸し出し受付中です。
ダビングも実費(2,000円くらい)で承ります。
詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

入会の御案内

社団法人国際MRA日本協会は、家庭と社会の健全な発展と世界平和の実現に貢献する具体的な活動を行なっています。その事業の充実、発展を図るために左記の会員制度を設け、より多くの方々のご加入を呼びかけています。

(1) 正会員 個人 年額 3,000円

法人 年額

(2) 賛助会員 個人 年額 50,000円

法人 年額 1,000円以上

郵便振替口座 50,000円以上

東京八一三八二八九

口座名 社団法人

国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供 ②機関紙「MAJニュース」等の送付 ③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

- 世界家族の仲間入り
- 信頼できる人との出会い
- 新時代に必要なる情報
- 心身の健康
- 問題解決の秘訣

高瀬会長の ご逝去を悼む

相馬雪香



故 高瀬正二氏

去る八月十一日に国際MRA日本協会会長として私どもが敬愛してやまない高瀬正二さまは逝去されました。氏のご経歴と功績は広く多面にわたりますが、ここでは、当協会会長として氏を偲ばせて頂きたいと存じます。

七月十三日の理事会にお元気で出席された高瀬さんは、「この分できくと来年のコーの大会には参加できそうだ」と語られました。来年はMRAが発足して五十周年に当たるので高瀬会長の参加が強く要望されているのです。高瀬さんは世界に多くの心の友だちをもっておられました。

「理屈じゃなくて実践だ」とおっしゃる高瀬さんのことはが今も聞かえてくるようです。当協会が社団法人として発足するに当たって高瀬さんは沢山の方々に会員になるように奨めてくださり会の基礎を作ってくださいました。

「分からなくてもいいんですよ、入って、MRAにふれていればだんだんに分かってくるよ。」いささか強引だと思っただけかも知れないのですが、多くの人が、それも世界中で、このような体験をしていることを思えば、MRAの真髄の一端にふれているとも言えます。「MRAは頭で分かる心で感じるものだ。」

と言われる高瀬会長のMRAとの出会いは十年も前にさかのぼります。

ニューセントアンドリュース・ゴルフクラブの再建に当たって、兄貴筋に当たるスコットランドのゴルフ場に行かれた帰途、ノルウェーのオスロに立寄られた時のことです。MRAの仲間では日本に多くの友人を持ち「イエンツさん」で親しまれている人が出迎えてくれました。飛行機はなにかの関係で午前二時、しかも土砂降りの中に到着したのですが、ビジョヌレになるものかわ、イエンツさんは初対面の人も多い高瀬さん一行の荷物から宿までのお世話をしたのです。その心温まる行為とイエンツさんの人柄が高瀬さんの心を捕らえたのでした。「理屈じゃないんだ」高瀬さんは実感されたと同僚しております。その後一九七七年にスイスのコーで開かれている欧米中心の産業人会議に「ぜひ日本の参加を」という要請に応じて石坂泰三氏や土光敏夫氏のご縁もあって東芝の労使のチームが参加を始めた時、高瀬さんが自ら団長で出席されました。貿易摩擦の予震が少しづつ感じられだした時でした。「日本は分からない」理屈一点ばりの欧米の人たちには日本の経済の奇跡的發展もすべてナゾめいていて分からないことば

かりでした。分からないからおそらく不信にもつながるわけです。東芝労使のペアはなんの不思議も、不自然さもなく、一緒に食事をし、余興には炭坑節を仲良く踊りもするので、「労使の交渉の時も、誰が正しいかのMRAの基本精神で話し合う」という高瀬さんの説明と「労使の関係は鏡のようなもの」といわれることばには実践の裏づけがあつて、人を納得させるものがありました。

その時以来、高瀬さんは体調をくずされた一九八二年まで、毎年スイスまで行かれたばかりでなく、アメリカ、インドとMRAの会合には日本を代表して出席してくださいました。その真摯なお人柄がどの位日本に対する信頼のちやもやした空気を払うのに役立ったか図り知れないものがあります。

二十一世紀に向うこれからの世界は物質万能、利害にふり回された二十世紀と訣別して人の心を尊び、いたわり合う時代に向おうとしていると言われていますが、その時に当たって人と人との心の結びつきを身をもって築いて下さった高瀬会長の生きざまは長く私どもの心に息吹き、今後の指標となることを確信しております。

(国際MRA日本協会副会長)